これから坂を登り、坂を降り、世附川に傍うて下る。予は偶然にも李白の『斷崖如レ削瓜。嵐光破二崖緣一』の句を想起して、宛も斯境の爲めに作りたるものゝ如く覺えた。一行の先發は山腹大紆盤の前端に進み、其の後隊は、未だ大紆盤の尾端を彷徨し、絶壁を隔て、互ひに呼應しつゝある。杜甫の『我行巳水濱。我僕猶木末』の句の、眞に我を欺かざるを知る。

斯くて愈よ峰阪峠に到れば、相駿の二國相接し、視野忽ち開濶。我等は峠の芝生に憩ひ、箱根、足柄の連山より、小山町、御殿場より、愛鷹山、沼津、駿河灣の海光を一望の中に收め、殆んど十時間を、溪谷の中に過ぎた我等には、神氣頓に王するを覺えた。時未だ午後三時を過ぎない。

峠を下れば柳島に到る。此處にて小山より出迎への諸君と相合し、小山町に到り、金時神社、金時公園等を見物し。豐門館に抵り、蘇峰會員等の諸有志に向つて、一場の小講話を試み、晩餐の箸を投じて、一路富士に面して快駛し、須走に抵れば、富士と併行して馳す。而して舊曆七月十四日の月は、富士に映じ、遂ひに富士と相伴うて双宜莊に歸著したるは、正に午後七時。小山町有志の總代諸君亦た相送つて來り、與に共に庭前の露床に倚り、今日の快遊を話し、澁茶を喫して相別れた。

午前四時に家を出で、午後七時に還る。其の里程は、恐らくは十數里、而して自動車以外の道路は、六七里を出でぬであらう。けれども我等に取りては、眞に愉快にして幸福なる一日であつた。（昭和十一年八月盡、嶽麓山中湖畔双宜莊に於て）

◇桑名瞥見

濱松から名古屋停車場に著したのは、午前十時半（昭和十一年十一月二十一日）、直ちに名古屋蘇峰會幹事淺野君、宅間君、大毎名古屋支局長の持田君等と、自動車で桑名に赴いた。市内を出づれば、一路坦々、眼界軒豁、木曾川に架したる尾張大橋を過ぎ、一向宗の蜂起して、信長を惱したる長島を横斷して、長谷川、揖斐川を、一橋にて繫ぐ伊勢大橋に近くや。桑名からの有志各位は、橋の袂まで出迎へられた。

斯くて揖斐川の櫻樹の堤を過ぎ、桑名に抵り、住吉神社を遙拜し、古へ東海道の七里渡

口を見、富田孝造君の社長である三重琺瑯會社の門前を過ぎ、竹内篁園君の邸に入る。古香滿室、汲古の氣人を襲ふ。未だ茶を喫するに遑あらず、直ちに其の收藏の古文書及び三重縣諸先賢の遺墨等を觀る。

特に花園天皇の宸翰、及び傳後醍醐天皇宸翰三通は、如何にも我等をして眼を拭はしめた。文部省指定重要美術品の、平野社法樂に關する和歌短冊帖は、後陽成天皇宸翰以下三十一葉、概ね當時の名公鉅卿の作を、一冊の中に鍾めたるもの。眞に貴重の珍品だ。而して別室に掲げたる松崎慊堂先生の秋萩帖跋文の草稿に、廣瀨蒙齋の添刪を加へたるものなど、予を感發せしめたるものが多かつた。

それから藩主の菩提寺である照源寺に詣づ。山門內の紅楓、參天の老松、配合の妙、住吉家の繪卷物の看がある。書院にて有志諸君と會食し。背後の藩主の塋域に上り、歷代の墳墓を禮拜した。鬱蒼たる喬樹柯を交へ、衆鳥和鳴し、眞に『鳥啼山更幽』の心地がした。

桑名は瀧川一益、本多忠勝、及び松平定信(奧州白河より原封地へ其子定永移封)、近くは立見大將、諸戸清六氏抔、世間に聞えたる人も多い。此處より熱田まで、海上七里の渡口にて、東海道の要衝であり、同時に三大川の川口を控へて、尾、濃、勢の米穀の集散地であつたが。時代の變遷に、今日では聊か取り殘されたる氣味ありと聞く。

さればにや其の地に入れば、何んとなく落ちつきたる、而して何となく文化的なる氣持がする。けれども閑却せられたことは間違ない。予の如きも、明治十三年以來、東海道を膝栗毛にて、若しくは半膝栗毛にて往來したる幾回なるを知らざれども。概ね四日市と熱田との間を過ぎ、桑名だけは失敬してゐた。併し一度は來り觀んと思うてゐたが、今回其心を果して、如何にも愉快を覺えた。

實は予も今や『近世日本國民史』にて、會津、桑名の舊幕掉尾の運動に、筆を著けんとしつゝあれば、猶更ら感慨深きものあつた。けれども堂々たる桑名が、今日まで市制をも敷かぬとは、餘りに情けなき心地がした。恐らくは新桑名の擡頭は、これからであらう。予は其の前途を祝福する。

◇多度神社と油島千本松

殘秋の日脚は速かつた。我等は桑名から多度山を詣して快駛した。田は七分通り刈り入れてゐる。疎籬の菊は殆んど凋んでゐる。多度山の一帶は、揖斐川々域を控へて屏風の如く其の南方に聳えてゐる。その裡面は美濃の養老山脈に連つてゐる。多度神社は往古は北伊勢大神宮と稱せられ、南伊勢皇大神宮と對照せられた程の由緒ある神社だ。社殿は山麓にありて、壯嚴の美なきも、老樹懸崖に峙ち、清水幽澗に流れ、如何にも清々しき心地がした。而して楓樹は多からざるも、殘紅數點、眞に人を惱すの風情があつた。

我等は山腹の盤石の下に埋れたるものが、明和年間崖崩れの爲めに出土したりと稱する、國寶の鏡面三十枚を觀た。何れも和鏡にて、藤原時代の物である。又た國寶の多度大神宮寺伽藍緣起並資財帳一卷を觀た。これは一時世間に散逸したが、或る特志家の手にて、神庫に收まることゝなつたと聞く。其の卷末の邊には、若干後人の加筆あるが如き說を做すものあるも。大體に於て、國寶たる價値は、斷じて爭ふ可からずであらう。

それより『近世日本國民史』に於て、予が特筆せる、寶曆年間、薩摩武士によりて修築したる——當時は木曾川も合流してゐた——揖斐川と、長良川の分水堤たる油島の千本松を

瀨戸加藤藤四郎の墓前に於ける蘇峰翁及び夫人

箱根小涌谷に於て右より
三人目三樹明治書院社長　蘇峰翁夫妻　三宅博士夫妻

觀る可く。先づ豫算超過の責を負うて、工事落成の後、割腹したる平田靱負以下四十九柱、病死者を合すれば、七十九柱を祠る治水神社に參詣した。それより千本松の堤上を過ぎ、其の記念碑を訪ひ、伊勢大橋の中央に達し。桑名よりの各位は西に、我等は東に、互ひに半日の快遊を叙して相分れた。

過日菱刈大將と相見たる際、大將は予に向つて油島の千本松を見たかと訊はれ、聊か返答に究したが。今や其の宿願を果すを得、如何にも借金を拂うたる心地がした。

同夜は名古屋大毎支局の主催にて、名古屋公會堂にて、講演會があり。持田君、下田君と共に演壇に立つた。今朝(十一月二十六日)獨逸と防共協定の公報に接し。予が當夜の演壇『人民戰線、國民戰線と我が皇道精神』は、豫じめ其の先容をなしたるが如く覺えたが。正直のところ、予は何もそれを豫知するほどの早耳では無かつた。

◇瀨戸見物

十一月二十二日の午前は、小閑を偷んで、名古屋から瀨戸を見學した。瀨戸は日本に於

ける陶磁の本場である。從前から陶磁を總稱して、瀨戸物と云ひ、而してそれを販賣する家を瀨戸物屋と云ひ、その群集したるところを、瀨戸物町と稱してゐるる。これは日本全國、概して皆な然りである。

我等は長久手の豐德二氏の古戰場を横ぎり、瀨戸に赴いた。瀨戸は尾州の東北端東春日井郡に屬し、郡中にて東南隅を占めてゐる。晩秋初冬の風物は、別に見る可きほどの光景無きも、亦た快暢を覺えた。名古屋を去る五里、思ひきや平郊盡きて、丘嶽起伏の裡に、一の熱鬧境を現出せんとは。

今更瀨戸の昔語りをするにも及ぶまい。此地の窯は一千年に溯ると云ふが、其の所謂る瀨戸をして今日あらしめたのは、陶祖加藤藤四郎春慶に歸せねばならぬ。彼は道元禪師に隨うて、貞應二年入宋し、安貞二年歸朝し、陶土を求めて、遂ひに此地に居を卜したりとの傳說がある。

今日に於ては昔時の風流は、何處にか飛び去りて、空は煤煙に暗く、川は陶泥に濁る。而して今や附近町村を合併して市制を敷いてゐる。其の生產額は、一年約一千五百萬圓、然も其の七割は輸出品なりと云ふ。

我等は陶祖所製の國寶狛犬を見、陶土採掘場を見、更らに赤津なる加藤作助邸を訪ひ、其の襲藏せる古瀨戸の名器を觀、茶を喫して去つた。實は雲興寺に赴きたいと思うたが、時間の都合で割愛した。

歸來名古屋の八勝館にて、午餐を喫した。諺に花より團子と云ふ、空腹に馳走も決して惡しからずであるが。滿庭の紅葉には、實に箸を把ることさへも、打ち忘れしめ、我等をして林下に佇立、低徊去る能はざらしめた。

但だ公會堂に於ける、名古屋聯合青年團の催しにかゝる、講演の時刻が、刻々相迫るが爲めに、身は詩境に入りて、一詩をも賦す餘裕を持たなかつた。

青年團の講演會も、或は青年諸君の骨頭を醒覺するに、小補あつたかと思ふ。同夜は名古屋を主とし。大垣、岐阜、一宮、豐橋等の蘇峰會諸位の團欒にて、所謂る文章報國五十年の祝會を催されたるは、予が深く感謝し、且つ慚惶禁ずる能はざるところ。同時に國際的選手前畑孃、小島孃と食卓を共にしたることは、我等に取りて、近頃の愉快であつた。

◇靜岡、清水、函根、熱海

十一月二十三日は名古屋を去り、靜岡に赴き、靜岡民友新聞社の新築を見た。宛も軍艦の仕組の如く、場所を經濟的に利用してゐる。それから清水にて蘇峰會支部の設立後、講演會、次に同市有志諸君と會食した。絃歌の代りに、詩吟があり、又た鞆川畔にて花火を打揚げ、川には錦魚を躍らせ、富士山の仕懸花火が半空に輝き、その倒景が水面に映じ、如何にも美觀であつた。而して更らに靜岡に還り、燈火人影の內を潛りて、當時祭禮中の淺間神社に參拜した。靜岡は連日のお祭り騷ぎにて、大繁昌であつた。

二十四日は三島にて、明治書院、民友社の諸氏と相會し、三島神社を參拜し、それから函根を攀ぢて小涌谷に一泊した。當日は前後に比類なき好晴にて、靜岡から函根まで、富士は恒に我等と相ひ伴うた。昔から三穗富士、薩埵富士、富士川富士、吉原富士、原富士、沼津富士と稱して、東海道中の大觀であるが、今日と云ふ今日は、殆んど其の總べての富士を見盡し、更らに函根の富士を見た。

特に舊函根街道に瀕する山中村の圓山には、明治戊辰十月明治天皇陛下の京都より行幸の際、富士を宸賞遊ばされたる聖蹟が在り。我等は暫らく自動車を止め、飽迄之を眺めた。右に富士、左に天城の連峰、前に駿河灣、眞に好風光だ。但だ風勁うして、殆んど帽を吹き飛ばさんとした。

官道崎嶇連二故關一。湖光隱見翠杉間。不レ憂眼界無二佳景一。描破天邊白雪山。

小涌谷は最早冬枯と思うたが、尙ほ若干の紅葉が殘つてゐた。

山氣蕭森絕二點塵一。浴餘風味自淸新。野花秋草皆凋盡。斜日殘楓也可レ人。

二十五日は故らに湖畔を迂迴し、十國峠に出で、熱海淸快樓にて、一同會食した。小涌谷から此處に來れば、亦た頓に氣候が逆轉したる心地がした。煙波渺々、初島は波上に浮べるに似たり。但だ殺風景であるは、眼前の海面を、卽今埋立最中の事だ。我等は如何なる理由、若しくは事情かは知らぬが、海面は熱海に取りては、生命線だ。之を縮むるは、恐らくは熱海の生命を縮むる所以であらう。若し熱海にして、伸張を欲せば、山手に向つて伸張す可しだ。これが予の素人意見だ。

此行は小春の天氣にて、演說も演松、名古屋、清水等にて、豫定以外に出でず。見聞の時間は多くなかつたが、隨處の蘇峰會員諸彥、及び有志の方々の好意にて、得るところ少くなかつた。但だ蒲原寶珠莊に田中青山先生を、訪問するの機會を逸したるだけが、遺憾であつた。

老記者の旅　終

老記者の旅
定價金貳圓

昭和十二年五月二十日印刷
昭和十二年五月二十五日發行

著者　德富猪一郎
東京市神田區錦町一丁目十六番地

發行者　三樹退三
東京市神田區三崎町二丁目一番地

印刷所　株式會社明章印刷所
印刷者　細谷祐三

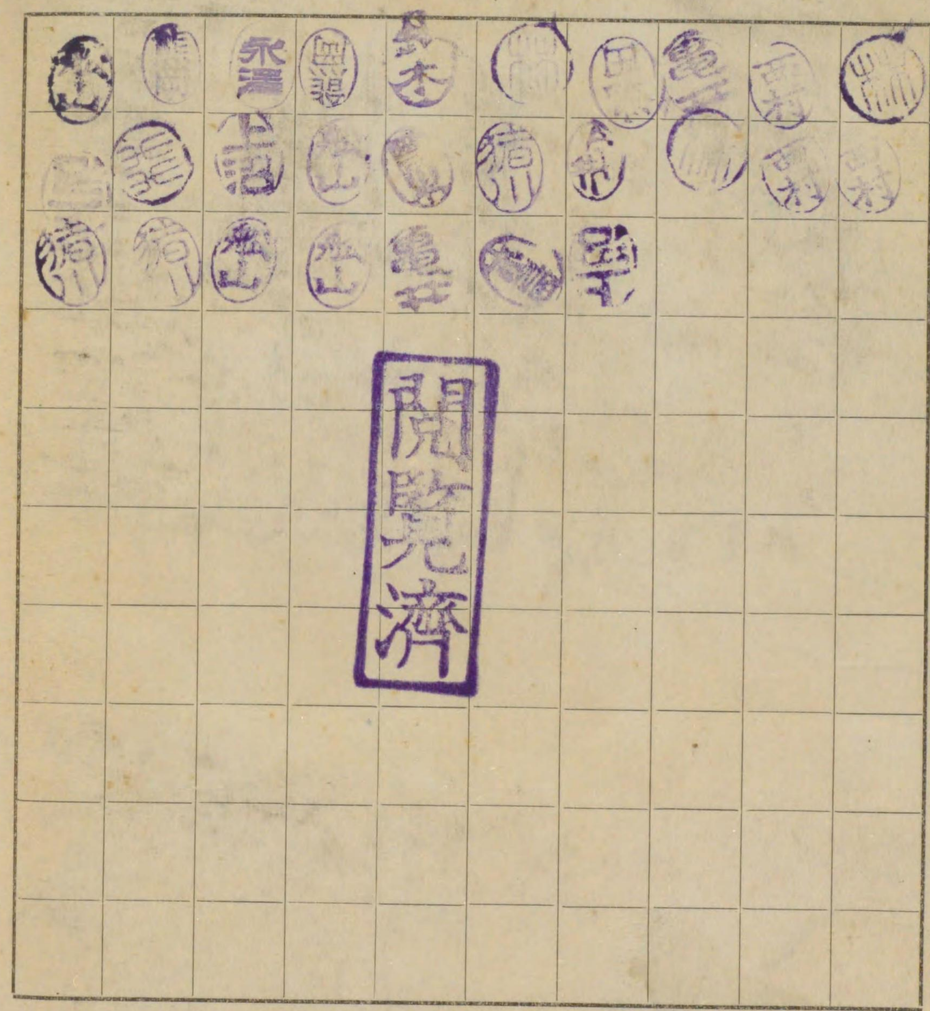
發行所　民友社
東京市神田區錦町一丁目十六番地

發賣所　株式會社明治書院
東京市神田區錦町一丁目十六番地
振替東京四九九一番

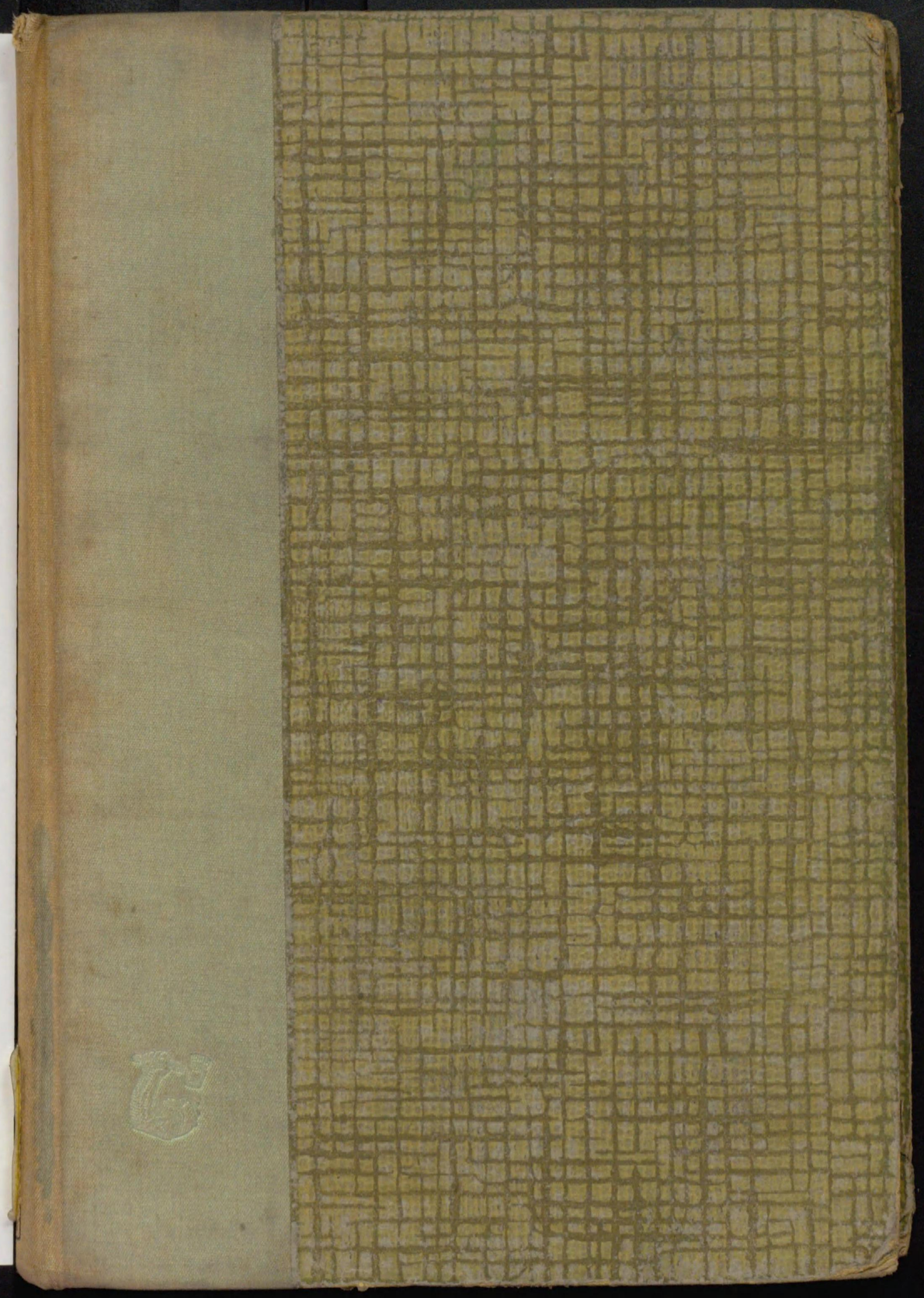
不許複製

704
158

12年 7月 13日



閲覧済



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black